

# 詩篇25:12における in directo の 古英語訳について

石 原 覚

## I

以下は詩篇作者が神に向き合った自らの生きる姿勢を述べたローマ詩篇 (Psalterium Romanum (PsRom)) の一節である。ここには in uia recta (真っ直ぐな道に) という表現が見出される。

- (1) pes enim meus stetit in uia recta in ecclesiis benedicam Dominum. (PsRom 25:12)<sup>1)</sup>

(我が足が真っ直ぐな道に立ったからである。集会において私は主を讚美するであろう。)

(2) はウルガータ (Vulgata) の詩篇、すなわちガリア詩篇 (Psalteirum Gallicanum (PsGall)) における (1) に対応する箇所である。(1) の in uia recta の代わりに in directo (真っ直ぐに) が用いられていることに気付く。

- (2) pes meus stetit in directo in ecclesiis benedicam te Domine (PsGall 25:12)<sup>2)</sup>

(我が足は真っ直ぐに立った。集会において私は、主よ、あなたを讚美するであろう。)

A~K の古英語の詩篇行間注解 (Psalter gloss)<sup>3)</sup>における、(1)(2) に対応する箇所では、in uia recta または in directo に対して (注解が与えられていない H を除いて)、何らかの注解が与えられている。すなわち A~E では (1) の in uia recta が、次の (3) におけるように、前置詞 on (A では in) に支配された weg (道) と (A と C では定冠詞付きの) riht (真っ直ぐな) によって訳されている。

- (3) fet soðlice min stod on wege þan rihtan . . . (PsGIC 25.12)

また F および I の二重注解の一方では、(2) の in directo が、以下の (4)(5) におけるように、それぞれ on に支配された riht (真っ直ぐなもの)、rihtung (真っ直ぐにすること) によって訳されている。

- (4) eart min stod on rihte . . . (PsGIF 25.12)

- (5) fot min stod on rihtum wege l on rihttinge . . . (PsGII 25.12)

注目すべきは、上記(5)の最初の注解および以下の(6)~(8)、すなわち G, I, J, K では、(2)の in directo を訳すのに、A~E におけると同様に、on に支配された weg と (G と J では定冠詞付きの) riht が用いられていることである。

- (6) fot min stod on þam rihtan wege . . . (PsGIG 25.12)

- (7) fot min soþlice stod on þam rihtan wege . . . (PsGIJ 25.12)

- (8) fot min stod on wege rihtan . . . (PsGIK 25.12)

本稿では、(2)の in directo の訳としてこれら(5)~(8)に見られる「真っ直ぐな道に」の意味の注解が不適当であることを明らかにしたい。

## II

先ず in directo というラテン語表現についてより詳しく見てみよう。

この句にある名詞 directum は、次の(9)において対格形で in に続き「真っ直ぐに」の意味を表すごとく、「直線」(‘a straight line’)<sup>4)</sup>の意味を持つ。

- (9) nec enim exire nisi per devexum potest diu inclusa, nec in directum cadere moderate aut sine concussione eorum per quae vel in quae cadit. (SEN. nat. 6, 20, 2)<sup>5)</sup>

(長い間閉じ込められていた水は、傾斜を通してでなければ外に出られず、真っ直ぐ穏やかに落ちることも、また落ちる時に通るものや、それへと向かって落ちるものを揺すらずに、落ちることもできない。)

問題の(2)に見られるのと同じ in directo という形の例を以下の(10)~(13)に挙げる。

- (10) ab eo leges iubent in directo pedum VIII esse uiam, in anfracto XVI, id est in flexu. (VARRO ling. 7, 15)<sup>6)</sup>

(これ [「湾曲」という語] について法令は、道は直線部で 8 歩尺、湾曲部、すなわち曲がっている所で 16 歩尺であることを定めている。)

- (11) verum si inopia loci aesculus defuerit, in tenuissimos axes quercus secetur, et primum in directo iactatis axibus, sequentibus in transverso stratis, binis clavis crebro ad contignationem confixis utiliter operi subiciuntur. (CET. FAV. 19)<sup>7)</sup>

(しかしもし土地の貧弱さ故に冬柏がなければ、柏をできる限り薄い

板に切り、板をまず真っ直ぐに敷き、次いで交差するように置き、多くの2つずつの棒で結合して床となるようにすれば、建造物の有益な土台となるであろう。)

- (12) *elidito iumentum et in brachiolo venam extantem quo loco invenies, cutem contra se in directo venae ad duos digitos aperies et venam diplancistrode inter nervos nimia subtilitate relevabis et . . . (CHIRON 100)<sup>8)</sup>*

(駄獣を倒し、大腿部の筋においてその部分〔肥大した腺〕から浮き出た血管を見つけたら、その上の皮膚を、血管に沿って真っ直ぐに、指2本分の幅まで切開し、血管をディプラキストローデース〔という手術器具〕で、腱の間で細心の注意を払って持ち上げ、……)

- (13) *Auferuntur enim iudicia Dei ab huiuscemodi anima ne ultra respicere se queat ut in directo iudiciorum Dei uideat abyssum multam sed ea solummodo quae sunt cecitatis semper orbata lumine conclusa sub confusione sua sentiat. (PASCHASIUS RADBERTUS Expositio in Lamentationes Hieremiae 3, 6)<sup>9)</sup>*

(そのような魂からは神の「裁きは取り上げられる」〔詩篇9:26〕ので、神の裁きに沿って真っ直ぐに大なる淵を見ようと、我が身を省みることは最早できず、常に光を奪われ、自らの屈辱の下に閉ざされて、盲目についての裁きのみを感知するのである。)

ここで注意すべきは、(10)における *in directo* の用法と、(11)~(13)におけるそれとが異なっていることである。すなわち *in directo* は、(11)~(13)においては——それぞれ *jacere* (敷く)、*aperire* (切開する)、*videre* (見る) という動詞を修飾する——「真っ直ぐに」という意味の様態を表す副詞句として用いられているのに対し、(10)においては「真っ直ぐな所で」という意味の場所を表す副詞句として用いられているのである。<sup>10)</sup>

### III

ここでは(2)が詩篇の注釈者たちによりどのように解釈されてきたかを見てみたい。

先ず以下は Cassiodorus (583没)<sup>11)</sup>が(1)を解釈した一節だが、当然のことながら「真っ直ぐな道に」という表現に基づいた解釈——それは神の命令のうちに、ということであるという——が述べられている。

*Pes enim meus stetit in uia recta; in ecclesiis benedicam Dominum. Inter*

concutientes haereses et mundi grauitet saeuientes angustias, hoc bene uir catholicus profitetur, quia *pes* eius immobilis perdurauit; qui licet importunis tribulationibus fluctuet, in parte fidei nescit quibuslibet necessitatibus commoueri. . . . *In uia recta*, hoc est in mandatis tuis, quae recta sunt et rectos faciunt oboedientes. . . .<sup>12)</sup>

(「我が足は真っ直ぐな道に立った。集会において私は主を讃美するであろう。」衝撃を与える異端や、世のひどく荒れ狂う不安の中で、正統的信者は、彼の「足」が不動のままであったことを大いに表明する。激しい苦難によって動揺することがあっても、信仰への関与においては、いかなる強制によっても揺らぎ得ないのである。……「真っ直ぐな道に」とは、あなたの命令のうちに、ということであり、それは真っ直ぐであって、真っ直ぐな者たちを服従させるのである。……)

一方、興味深いのは *in directo* が、以下引用する5世紀から20世紀の注釈者たちによる(2)の解釈では、いずれにおいても場所的な意味で——特に道にかかわる意味で——捉えられていることである。すなわち、次の *Iulianus Aeclanensis* (455以前没)の解釈における「真っ直ぐなことの小道」(*recti trames*)

*Pes meus stetit in directo*. Nosti, inquit, quemadmodum a recti tramite nunquam in praua detorserim.<sup>13)</sup>

(「我が足は真っ直ぐな所に立った。」いかに私が、真っ直ぐなことの小道から、曲がった物へと決して逸れなかったかを、あなたは知っている、と言う。)

次の *Haymo* (853没)の解釈における「高い所」(*altus locus*)、「キリスト」(*Christus*)

Qui bene sum aptus cuius miserearis, quia <meus pes,> id est, afflictio mea <stetit,> id est, firmiter permansit <in directo,> id est, in alto loco: vel in directo, id est, in Christo. Alia enim translatio in uia recta: Christus enim dicit: <Ego sum uia, ueritas, et uita (*Joan.* XIV).> Vel <in directo,> id est, in ordine catholico, et <te etiam, Domine, benedicam in <[sic]ecclesiis> scilicet, habitans in consortio fidelium.<sup>14)</sup>

(大いにふさわしい私を憐れみ給え。「我が足は」すなわち我が苦難は、「真っ直ぐな所に」すなわち高い所に、「立った」すなわちしっかりと残ったからである。あるいは真っ直ぐな所には、すなわちキリスト

において、ということである。別の訳では、真っ直ぐな道に、とあり、キリストは「私は道、真理、そして命である」(ヨハネ14[:6])と言っているからである。あるいは「真っ直ぐな所に」とは、すなわち正統的秩序において、ということであり、「それ故私は、主よ、あなたを集会において」つまり信徒たちと共に住みながら「讃えるであろう。)」次の Bernardus Claraeuallensis (1159没)の解釈における「障害物、躓かせる物、妨げる物」(offensio, scandalum, impedimentum)

Sic etiam proficere in sancta conversatione, et ascendere per gradus scalae quae Iacob apparuit, ac iuxta quod ait Psalmista, de virtute in virtutem ire desiderantes, saepius scandalum patimur a pede quodam pusillanimitatis et negligentiae nostrae, qui nimirum descendere magis ac remissius ire conatur; sed abscidi eum necesse est, ut pes gratiae, qui stat in directo, currere possit sine offensione, sine scandalo, sine impedimento. (In Commemoratione Sancti Michaelis 2, 4)<sup>15)</sup>

(かくのごとく神聖な生き方において進み、ヤコブに現れた階梯の段を上り、また詩篇作者が言う通り、力から力へ行くことを、我々は欲するが、よりしばしば我々の臆病で怠惰な足により躓く。その足は当然むしろ下り、より楽に行くことを求めるのである。しかしそれは切り取られねばならない。真っ直ぐな所に立つ、恩寵を得た足が、障害物も、躓かせる物も、妨げる物もなしに、走ることができるように。) 次の19世紀の注釈者 A. Bardani の解釈における「真っ直ぐな山道」(callis directus)

*Nam, ut dixi, pes meus semper stetit in calle a justitia, et pietate directo; ...*<sup>16)</sup>

((述べたように)我が足は(常に、義と敬虔の)真っ直ぐな(山道)に立った(からである)。)

次の20世紀の注解者 J. Niglutsch の解釈における「真っ直ぐな道」(via recta)

Sens.: mea agendi et conversandi ratio permanenter iusta et recta est. *in directo* = in via recta.<sup>17)</sup>

(意味: 行動し、生きる私の理由は、永遠に正しく、真っ直ぐである。「真っ直ぐな所に」=真っ直ぐな道に。)

さらに次の同じく20世紀の注解者 I. Knabenbauer の解釈における「安全で

心配のない、かつ平坦な道」(tuta ac secura via atque plan)

Quare confidenter se tutam ac securam habere viam atque planam affirmat v. 12 *pes meus stetit in directo*, stat in plana via, ubi ingredi licet sine offendiculo, sine periculo;<sup>18)</sup>

(それ故に、安全で心配のない、かつ平坦な道を有すると、自信を持って断言する——「我が足は真っ直ぐな所に立った」(12節)、障害も危険もなく歩ける平坦な道に立つのである。)

——こうした表現は、いずれも(2)の *in directo* がこれらの注釈者たちにより場所的な意味で——すなわち(11)~(13)に見られたような様態の副詞句としてではなく、(10)におけるような場所の副詞句として——捉えられていることを示すものである。

なお M. Mlčoch<sup>19)</sup>, J. Ecker<sup>20)</sup>, G. Hoberg<sup>21)</sup>, A. Schulte<sup>22)</sup>, V. Thalhofer<sup>23)</sup>, A. Sleumer<sup>24)</sup>, A. Blaise<sup>25)</sup>も(2)の *in directo* を場所的な意味で捉えている。

だが果たして(2)の *in directo* を場所的に解釈することは妥当なのであろうか。

#### IV

ここで詩篇25:12のギリシャ語原文、すなわち七十人訳聖書(LXX)における対応箇所(14)に目を転じてみよう。(1)の *in uia recta* と問題の(2)の *in directo* は、この箇所の *ἐν εὐθύτητι* (真っ直ぐに)に由来する。

(14) ὁ γὰρ πούς μου ἔστη ἐν εὐθύτητι· ἐν ἐκκλησίαις εὐλογήσω σε, κύριε. (Lxx Ps.25(26).12)<sup>26)</sup>

(我が足が真っ直ぐに立ったからである。集会において私は、主よ、あなたを讃美するであろう。)

ギリシャ語 *εὐθύτης* は次の(15)におけるように「真っ直ぐなこと」の意味を持つ。

(15) Τέταρτον δὲ γένος ποιότητος σχῆμά τε καὶ ἡ περὶ ἕκαστον ὑπάρχουσα μορφή, ἔτι δὲ πρὸς τούτοις εὐθύτης καὶ καμπυλότης, καὶ εἴ τι τούτοις ὁμοίων ἐστίν· (Arist.Cat.10<sup>a</sup>12)<sup>27)</sup>

(性質の4番目の種類は、形や、それぞれのものの周囲に存在する姿であるが、それらに加えて、真っ直ぐなことや曲がっていること、また何かそれらに似たことがあれば、それもそうである。)

この語は次の(16)では前置詞 εις と共に「真っ直ぐに」の意味の副詞句を構成する。

- (16) καὶ λάρυγξ σου ὡς οἶνος ὁ ἀγαθὸς πορευόμενος τῷ ἀδελφιδῶ μου εἰς εὐθύτητα ἰκανούμενος χεῖλεσίν μου καὶ ὁδοῦσιν. (Lxx Ca.7.10)<sup>28)</sup>  
(あなたの喉は良い葡萄酒のよう。我が愛する人へ真っ直ぐに行き、我が唇と歯に心地良い。)

またこの語は次の(17)におけるごとく転義して「公正」の意味も表す。

- (17) ὁ θρόνος σου ὁ θεὸς εἰς τὸν αἰῶνα τοῦ αἰῶνος, καὶ ἡ ῥάβδος τῆς εὐθύτητος ῥάβδος τῆς βασιλείας σου. (Ep.Hebr.1.8)<sup>29)</sup>  
(あなたの王座は、神よ、いつまでも永遠に。公正の笏が、あなたの王位の笏。)

では問題の(14)に見られる ἐν εὐθύτητι という表現の例を次の(18)に見てみよう。

- (18) Τοὺς μὲν εἰς τὴν οἰκοδομὴν ὑπάγοντας καὶ μὴ λατομουμένους, τούτους ὁ κύριος ἐδοκίμασεν, ὅτι ἐπορεύθησαν ἐν τῇ εὐθύτητι τοῦ κυρίου καὶ καταωρθώσαντο τὰς ἐντολάς αὐτοῦ. (Herm.vis.3.5.3)<sup>30)</sup>  
(切り出されることなく建物に行くもの〔石〕たち、主はそれらが、主の公正において歩み、彼の命令を遂行したと確認した。)

- (18) の ἐν εὐθύτητι は「公正において(をもって)」という意味で πορεύεσθαι (歩む) を修飾し、様態の副詞句として用いられていると考えられる。<sup>31)</sup>

ところで(14)の ἐν εὐθύτητι は、ヘブライ語原文の רַחֲבֵי־מַדְבָּר (平らな地面に) に対応するが、(14)のヘブライ語原典における対応箇所である詩篇26:12の רַחֲבֵי־מַדְבָּר は、BDBにおいて「(障害物のない) 平らな所、安全・安楽・繁栄の場所の比喩」(‘level place (free from obstacles), fig. for place of safety, comfort, and prosperity’)<sup>32)</sup>の語義のもとに、また F. Zorell のヘブライ語辞典においても、比喩的に用いられ詩または預言書の限られた散文のみに現れる語彙として「(よろめいたり滑ったりする危険のない) 平らな所または道」(‘locus s. via plana, ubi non est titubationis lapsusve periculum’)<sup>33)</sup>の語義のもとに挙げられている。つまり(14)の ἐν εὐθύτητι に対応する原語表現は場所的な意味で捉えられているのである。

さらに C. G. Bretschneider の新約ギリシャ語辞典では、εὐθύτης の「真っ直ぐなこと、真っ直ぐ、平らであること」(‘recta ratio, rectum, planum

esse') の語義が挙げられたあと、続いて (14) および後に挙げる (31) について「真っ直ぐな道について」('de recta via') の解釈が与えられている。<sup>34)</sup>

ならば先に見た in directoのごとく、ἐν εὐθύτητι も場所の副詞句として——すなわち「真っ直ぐな所で (に)」の意味で——用いられることはあるのだろうか。

この問いに答えるためには、LXX における (14) 以外の ἐν εὐθύτητι の用例もすべて調べる必要がある。

## V

LXX において ἐν εὐθύτητι は (14) の他に 13箇所で見られるが、<sup>35)</sup> そのうち以下の (19)~(23) の 5箇所においては κρίνειν (裁く) を修飾する。

(19) καὶ αὐτὸς κρίνει τὴν οἰκουμένην ἐν δικαιοσύνῃ, κρίνει λαοὺς ἐν εὐθύτητι. (Lxx Ps.9.9)

(彼は義をもって世界を裁き、公正をもって諸国民を裁くであろう。)

(20) εὐφρανθήτωσαν καὶ ἀγαλλιάσθωσαν ἔθνη, ὅτι κρίνεις λαοὺς ἐν εὐθύτητι καὶ ἔθνη ἐν τῇ γῆ ὁδηγήσεις. (Lxx Ps.66(67).5)

(諸民族が喜び、歡呼するように。あなたが公正をもって諸国民を裁き、地の諸民族を導くであろうから。)

(21) εἶπατε ἐν τοῖς ἔθνεσιν Ὁ κύριος ἐβασίλευσεν, καὶ γὰρ κατώρθωσεν τὴν οἰκουμένην, ἣτις οὐ σαλευθήσεται, κρίνει λαοὺς ἐν εὐθύτητι. (Lxx Ps.95(96).10)

(諸民族の中で言え、「主は王であり、世界を確立し、それは揺るがされないであろう。彼は公正をもって諸国民を裁くであろう。」)

(22) ὅτι ἤκει κρίναι τὴν γῆν· κρίνει τὴν οἰκουμένην ἐν δικαιοσύνῃ καὶ λαοὺς ἐν εὐθύτητι. (Lxx Ps.97(98).9)

([主は]地を裁くために来ているからである。彼は義をもって世界を、公正をもって諸国民を、裁くであろう。)

(23) καὶ διέπη τὸν κόσμον ἐν ὁσιότητι καὶ δικαιοσύνῃ καὶ ἐν εὐθύτητι ψυχῆς κρίσιν κρίνει, (Lxx Wi.9.3)

([人が] 純潔と義をもって世界を司り、魂の公正をもって裁きを行うように。)



これら5箇所 の ἐν εὐθύτητι は、公正な裁きについて用いられていることから、「公正において (をもって)」という意味の様態の副詞句であると言える。<sup>36)</sup>

以下の(24)～(31)は残りの8箇所であるが、ἐν εὐθύτητι は(24)～(27)の4箇所においては、「義」(δικαιοσύνη)、「誠実」(ἀληθεια) ないしは「純潔」(ὁσιότης) についての様態の副詞句と共に何らかの動詞を修飾する。すなわち ἐν εὐθύτητι は、(24) では λατρεύειν (仕える) を ἐν δικαιοσύνη (義をもって) と共に

(24) καὶ νῦν φοβήθητε κύριον καὶ λατρεύσατε αὐτῷ ἐν εὐθύτητι καὶ ἐν δικαιοσύνη καὶ περιέλεσθε τοὺς θεοὺς τοὺς ἀλλοτρίους, οἷς ἐλάτρευσαν οἱ πατέρες ὑμῶν ἐν τῷ πέραν τοῦ ποταμοῦ καὶ ἐν Αἰγύπτῳ, καὶ λατρεύετε κυρίῳ. (Lxx Jo.24.14)

(今あなたたちは主を恐れ、公正と義をもって彼に仕え、あなたたちの先祖が河の向こう側とエジプトで仕えた、異邦の神々を除去し、主に仕えよ。)

(25) では διέρχεσθαι (歩む) を ἐν ἀληθείᾳ καὶ ἐν δικαιοσύνη (誠実と義をもって) と共に

(25) Σὺ ἐποίησας μετὰ τοῦ δούλου σου Δαυὶδ τοῦ πατρὸς μου ἔλεος μέγα, καθὼς διήλθεν ἐνώπιόν σου ἐν ἀληθείᾳ καὶ ἐν δικαιοσύνη καὶ ἐν εὐθύτητι καρδίας μετὰ σοῦ, καὶ ἐφύλαξας αὐτῷ τὸ ἔλεος τὸ μέγα τοῦτο δοῦναι τὸν υἱὸν αὐτοῦ ἐπὶ τοῦ θρόνου αὐτοῦ ὡς ἡ ἡμέρα αὕτη (Lxx 3 Ki.3.6)

(あなたの僕、我が父ダビデが、誠実と義とあなたに対する心の公正をもって、あなたの前を歩んだので、あなたは彼に大いなる慈悲を与え、その慈悲を彼のために保ち、今日のごとく、彼の息子をその王座の上に与えた。)

(26) では πορεύεσθαι (歩む) を ἐν ὁσιότητι καρδίας (心の純潔をもって) と共に

(26) καὶ σὺ ἐὰν πορευθῆς ἐνώπιον ἐμοῦ, καθὼς ἐπορεύθη Δαυὶδ ὁ πατήρ σου, ἐν ὁσιότητι καρδίας καὶ ἐν εὐθύτητι καὶ τοῦ ποιεῖν κατὰ πάντα, ἃ ἐνετείλαμην αὐτῷ, καὶ τὰ προστάγματά μου καὶ τὰς ἐντολάς μου φυλάξης, (Lxx 3 Ki.9.4)

(もしお前が、お前の父ダビデが歩んだごとく、心の純潔と公正をもつ

て、我が前を歩み、私が彼に命じた一切のことに従って行動し、我が定めと我が命令を守るならば、)

そして (27) では ποιεῖν (行う) を ἐν ἀληθείᾳ (誠実をもって) と共に (27) ἐστηριγμένοι εἰς τὸν αἰῶνα τοῦ αἰῶνος, πεποιημένοι ἐν ἀληθείᾳ καὶ εὐθύτητι. (Lxx Ps.110(111).8)

(〔彼の命令はすべて信用できるものであり、〕永遠に確立され、誠実と公正をもって行われる。)

修飾している。よってこれら 4 箇所における ἐν εὐθύτητι は、共に用いられている副詞句と同様、様態の副詞句——「公正において (をもって)」の意味の——として理解できる。<sup>37)</sup>

残りの 4 箇所のうち (28)(29) の 2 箇所において ἐν εὐθύτητι は、それぞれ ἐξομολογείσθαι (感謝する)、δικαιοῦν (認める) を修飾するが

(28) ἐξομολογήσομαι σοι, κύριε, ἐν εὐθύτητι καρδίας ἐν τῷ μεμαθηκέναι με τὰ κρίματα τῆς δικαιοσύνης σου. (Lxx Ps.118(119).7)

(あなたの義の裁きを学んだ時、主よ、私は心の公正をもって、あなたに感謝するであろう。)

(29) Ἐγὼ δικαιοῶ σε, ὁ θεός, ἐν εὐθύτητι καρδίας, ὅτι ἐν τοῖς κρίμασίν σου ἡ δικαιοσύνη σου, ὁ θεός. (Lxx Ps.Sal.2.15)

(私は、神よ、あなたを心の公正をもって義と認めるであろう。あなたの義が、神よ、あなたの裁きにあるからである。)

どちらにおいても εὐθύτης は καρδίας (心の) という属格を伴っており、やはりこれらにおける ἐν εὐθύτητι は「公正において (をもって)」の意味で捉えることができる。<sup>38)</sup>

では残りの 2 箇所の (30)(31) において ἐν εὐθύτητι がいかなる意味で用いられているか見てみよう。(30) では τιθέναι (置く) を

(30) μὴ ζητεῖ γενέσθαι κριτής, μὴ οὐκ ἰσχύσεις ἐξᾶραι ἀδικίας, μήποτε εὐλαβηθῆς ἀπὸ προσώπου δυνάστου καὶ θήσεις σκάνδαλον ἐν εὐθύτητί σου. (Lxx Si.7.6)

(お前は不正を取り除くことができないかもしれないので、裁判官になろうと欲するな。有力者の面前で恐れ、お前の公正に罣を置くことのないように。)

(31) では ἐπιβαίνειν (歩む) を

(31) ἐξ ἄνθους ὡς περκαζούσης σταφυλῆς εὐφράνθη ἡ καρδιά μου ἐν

αὐτῆ. ἐπέβη ὁ πούς μου ἐν εὐθύτητι, ἐκ νεότητός μου ἔχνευον αὐτήν.  
(Lxx Si.51.15)

(葡萄の花から房が色付くごとく、我が心はそれ [知恵] を喜んだ。  
我が足は真っ直ぐに歩み、私は我が若年より、それを求めていた。)

ἐν εὐθύτητι は修飾するが、これら 2 箇所におけるこの句の意味を捉えるため、これらの箇所のラテン語訳に目を向けたい。以下の (32)(33) は (30) の、(34) は (31) のラテン語訳である。(32) では「機転に」(in agilitate)、(33) では「公平に」(in aequitate) という抽象名詞を用いた表現へと、それぞれ ἐν εὐθύτητι が訳されているのがわかる。

(32) noli quaerere fieri iudex nisi si valeas virtute inrumpere iniquitates ne forte extimescas faciem potentis et ponas scandalum in agilitate tua (Sir 7:6)

(不正を打ち砕くことができなければ、裁判官になろうと欲するな。  
有力者の顔を恐れ、お前の機転に罾を置くことのないように。)

(33) . . . ne fortè extimescas faciem potentis, & ponas scandalum in aequitate tua.  
(Sir [vet.lat.] 7:6)<sup>39)</sup>

(……有力者の顔を恐れ、お前の公平に罾を置くことのないように。)

従って (30) の ἐν εὐθύτητι は比喩的な「公正において」の意味で捉えられるべきである。<sup>40)</sup>(34) では「真っ直ぐな歩行を歩む」(ambulare iter rectum) という表現が見られる。

(34) . . . ambulavit pes meus iter rectum a iuventute mea investigabam eam (Sir 51:20)

(……我が足は真っ直ぐな歩行を歩み、私は我が若年より、それ [知恵] を求めていた。)

よって (31) の ἐν εὐθύτητι は原義的な「真っ直ぐに」という意味の様態の副詞句として用いられていると考えられる。<sup>41)</sup>

以上から、問題の (14) のそれを別にすれば、LXX に現れる ἐν εὐθύτητι はいずれも「真っ直ぐな所に (で)」という位置的な意味では用いられていないということがわかった。

## VI

LXX の中で ἐν εὐθύτητι という形以外で εὐθύτης が現れるのは、すでに見た前置詞 εἰς と共に「真っ直ぐに」の意味で捉えられる (16) を除けば、

以下の(35)～(42)の8箇所においてである。これらの箇所でも *εὐθύτης* が「真っ直ぐな所」という場所的な意味で用いられていないか確認しておこう。(35)～(37)においては *ὁρᾶν* (見る) の目的語として

(35) ὅτι δίκαιος κύριος καὶ δικαιοσύνας ἠγάπησεν, εὐθύτητα εἶδεν τὸ πρόσωπον αὐτοῦ. (Lxx Ps.10(11).7)

(主は正しく、義を愛したからである。彼の顔は公正を見た。)

(36) ἐκ προσώπου σου τὸ κρίμα μου ἐξέλθοι, οἱ ὀφθαλμοί μου ιδέτωσαν εὐθύτητας. (Lxx Ps.16(17).2)

(あなたの顔から我が裁きが出、我が目が公正を見るように。)

(37) φύλασσε ἀκακίαν καὶ ἰδὲ εὐθύτητα, ὅτι ἔστιν ἐγκατάλειμμα ἀνθρώπων εἰρηνικῶν. (Lxx Ps.36(37).37)

(無垢を守り、公正を見よ。平和を好む人間には子孫があるからである。)

(38) においては *κρίνειν* (裁く) の目的語として

(38) διηγῆσομαι πάντα τὰ θαυμάσιά σου, ὅταν λάβω καιρόν· ἐγὼ εὐθύτητας κρίνω. (Lxx Ps.74(75).2)

(機会を得れば、私はあなたの驚くべき業を物語るであろう。私は公正を裁くであろう。)

(39) においては *ἐτοιμάζειν* (用意する) の目的語として

(39) καὶ τιμὴ βασιλέως κρίσιν ἀγαπᾷ· σὺ ἠτοίμασας εὐθύτητας, κρίσιν καὶ δικαιοσύνην ἐν Ἰακωβ σὺ ἐποίησας. (Lxx Ps.98(99).4)

(王の名誉は裁きを愛する。あなたは公正を用意し、裁きと義をヤコブにおいて、あなたは行った。)

(40) (41) においては属格形 *εὐθύτητος* (公正の) で先行する名詞を修飾して

(40) ὁ θρόνος σου, ὁ θεός, εἰς τὸν αἰῶνα τοῦ αἰῶνος, ῥάβδος εὐθύτητος ἢ ῥάβδος τῆς βασιλείας σου. (Lxx Ps.44(45).7)

(あなたの王座は、神よ、いつまでも永遠に。あなたの王位の笏は公正の笏。)

(41) πολλὰ ἐζήτησεν Ἐκκλησιαστής τοῦ εὐρεῖν λόγους θελήματος καὶ γεγραμμένον εὐθύτητος, λόγους ἀληθείας. (Lxx Ec.12.10)

(伝道者は、望ましい言葉と公正な書き物、真実の言葉を見付けようと、大いに努めた。)

そして (42) においては ἀγαπᾶν (愛する) の主語として、εὐθύτης は現れている。

(42) Ἀγαλλιασώμεθα καὶ εὐφρανθῶμεν ἐν σοί, ἀγαπήσομεν μαστοὺς σου ὑπὲρ οἶνον· εὐθύτης ἠγάπησέν σε. (Lxx Ca.1.4)

(私たちは歓呼して、あなたのことを喜びましょう。私たちはあなたの胸を葡萄酒よりも愛するでしょう。公正はあなたを愛しました。)

これらのいずれの εὐθύτης も「真っ直ぐな所」という場所的な意味ではなく、比喩的な「公正」または「公正な行い」の意味で捉えることができる。<sup>42)</sup>

なお次の Theodotion によるダニエル書の翻訳の (43) において、εὐρίσκεσθαι (見出される) の主語として現れる εὐθύτης も「公正」の意味で解すことができる。

(43) ὁ θεός μου ἀπέστειλεν τὸν ἄγγελον αὐτοῦ, καὶ ἐνέφραξεν τὰ στόματα τῶν λεόντων, καὶ οὐκ ἐλυμήναντό με, ὅτι κατέναντι αὐτοῦ εὐθύτης ἠύρέθη μοι· καὶ ἐνώπιον δὲ σοῦ, βασιλεῦ, παράπτωμα οὐκ ἐποίησα. (Thd.Da.6.23)

(我が神は彼の天使を遣わし、獅子たちの口を塞ぎ、それらは私を傷付けなかった。彼の前で私について公正が見出されたからである。また、あなたの面前で、王よ、私は過ちを犯さなかった。)

ちなみに新約において εὐθύτης は、すでに見た (17) —— 詩篇44:7 の引用で (40) とほぼ同一 —— 以外には見られない。

## VII

これまでIV~VIを通じて、問題の (14) 以外の LXX における εὐθύτης の全22例—— (16), (19)~(31), (35)~(42) ——を見てきたが、場所的な意味で——「真っ直ぐな所」の意味で——用いられていると考えられる例はないと言える。

さて、(14) は Theodoretus Cyrrhensis (393頃-458頃) により以下のように解釈されている。

«... Ὁ ποὺς [sic] μου ἔστη ἐν εὐθύτητι.» Τέως δὲ καὶ τούτοις συνῶν, τῆ τῆς πίστεως ἀπλότητι κέχρημαι, καὶ πάσης ἐμαντὸν κακίας ἐχώρισα, κὰν τῆ τῆς εὐσεβείας εὐθύτητι τοὺς πόδας ἐρείσας, ἔστηκα τέως

ἀσφαλῶς καὶ βεβαίως. Αντιβολῶ δὲ εἰς τέλος ταύτην φυλάξει τὴν  
 πρῶτον· ἔσται δὲ τοῦτο, εἰ τῆς μετὰ τούτων ἀπαλλαγείην οἰκήσεως.<sup>43)</sup>  
 (「……我が足は真っ直ぐに立った。」しばらくの間それらの[不敬虔な]  
 者たちとも共にありながら、私は信仰の質朴さを帯び、あらゆる悪か  
 ら自分を引き離れたが、もし足を畏敬の真直に固定させたなら、私は  
 しばらくの間しっかりと揺るぎなく立つであろう。だが私は最後まで、  
 この状態を維持することを願う。それは、もし私とその者たちとの住  
 みかから開放されるなら、実現するであろう。)

ここには ἐν εὐθύτητι に関連して、比喩的な表現——「足を畏敬の真直に  
 固定させる」(τῆ τῆς εὐσεβείας εὐθύτητι τοὺς πόδας ἐρειδεῖν)——や様態  
 的な表現——「しっかりと揺るぎなく立つ」(ιστάναι ἀσφαλῶς καὶ  
 βεβαίως)——は見られても、「真っ直ぐな所」という場所的な表現は見ら  
 れない。

さらに Euthymius Zigabenus (11-12世紀) は (14) を以下のように解釈する。

Ὁ πούς μου ἔσται ἐν εὐθύτητι. Διότι ὁ πούς μου ἐδράσθη ἐν ὀρθότητι,  
 τουτέστιν, Αἱ ὁδοὶ μου σκολιότητος ἀπέχονται ὅπερ ὁμοίον ἐστι τῷ,  
 Ἐν ἀκακία μου ἐπορεύθην.<sup>44)</sup>

(「我が足は真っ直ぐに立った。」我が足は真っ直ぐに据えられた、す  
 なわち我が道は曲がっていることがないからである。これは「我が無  
 垢において進んだ」[25:11]と同様である。)

ここには「我が道は曲がっていることがない」(αἱ ὁδοὶ μου σκολιότητος  
 ἀπέχονται) という場所的な記述も見られるが、それに先立って εὐθύτης  
 が様態を表す ὀρθότης 「直立」(‘upright posture, erectness’)<sup>45)</sup>により言い換  
 えられている。

よってこれら 2 人のギリシャ語による注釈者たちは、(14) の ἐν  
 εὐθύτητι に場所的な意味を(少なくとも積極的に)認めていないと言  
 える。

以上、問題の (14) のそれを除く LXX におけるすべての εὐθύτης の用例  
 の吟味、そして (14) への Theodoretus および Euthymius による解釈の分析  
 から、(14) の ἐν εὐθύτητι は場所的な意味で——「真っ直ぐな所に」の意味  
 で——用いられているのではないと認められる。故に (1) の PsRom の「真っ  
 直ぐな道に」(in uia recta) という訳は、実は意識であるとわかる。

ならば (14) の ἐν εὐθύτητι は、(19)~(30) に見られたような比喩的な「公

正において(をもって)」「公正に」と、(31)に見られたような原義的な「真っ直ぐに」のどちらの意味で捉えられるべきであろうか。

## VIII

T. Muraoka の旧約ギリシャ語辞典は、問題の(14)を εὐθύτης の「(道徳的完全さ) ('moral integrity') の語義のもとに、「敬虔な者たちの」 ('of the pious') と付記して挙げている。<sup>46)</sup> また A. Pietersma は(14)を「我が足は真っ直ぐに(公正において)立った。……」 ('My foot stood in uprightness; ...')<sup>47)</sup> と訳している。すなわち前者は(14)の ἐν εὐθύτητι を「公正において(をもって)」の意味で、後者はそれを「真っ直ぐに」とも「公正において(をもって)」ともどちらとも取れる意味 ('in uprightness') で捉えている。

では(14)の ἐν εὐθύτητι が「真っ直ぐに」と「公正において(をもって)」のどちらの意味で用いられているか判断する手がかりを得るため、(14)を除く LXX の詩篇における全12箇所(19)~(22), (27)(28), (35)~(40)——が PsGall においていかなるラテン語に訳されているかを、以下の(44)~(55)に見てみよう。

これらの箇所(14)の εὐθύτης への訳語として最も多く見られるのは *aequitas* (公平)である。(20)~(22), (27), (35)~(37)の7箇所(14)の εὐθύτης は、(44)~(50)の *aequitas* へと訳されている。

(44) ... quoniam iudicas populos in *aequitate* et gentes in terra diriges (PsGall 66:5)

(……あなたが公平をもって諸国民を裁き、地の諸民族を導くであろうから。)

(45) dicite in gentibus quia Dominus regnavit ... iudicabit populos in *aequitate* (PsGall 95:10)

(諸民族の中で言え、「主は王であり、……彼は公平をもって諸国民を裁くであろう。」)

(46) ... iudicabit orbem terrarum in iustitia et populos in *aequitate* (PsGall 97:9)

(……彼は義をもって世界を、公平をもって諸国民を、裁くであろう。)

(47) fidelia omnia mandata eius confirmata in saeculum saeculi facta in veritate et *aequitate* (PsGall 110:8)

(彼の命令はすべて信用できるものであり、永遠に確立され、誠実と公平をもって行われる。)

(48) ... *aequitatem* vidit vultus eius. (PsGall 10:8)

(……彼の顔は公平を見た。)

(49) ... oculi tui videant *aequitates* (PsGall 16:2)

(……あなたの目が公平を見るように。)

(50) custodi innocentiam et vide *aequitatem* ... (PsGall 36:37)

(無垢を守り、公平を見よ。……)

次いで(28)(39)(40)の3箇所のエὐθύτηςは、(51)~(53)におけるごとく *directio* (廉直) へと訳されている。

(51) confitebor tibi in *directione* cordis in eo quod didici iudicia iustitiae tuae (PsGall 118:7)

(あなたの義の裁きを学んだ時、私は心の廉直をもって、あなたに感謝するであろう。)

(52) ... tu parasti *directiones* iudicium et iustitiam in Iacob tu fecisti (PsGall 98:4)

(……あなたは廉直を用意し、裁きと義をヤコブにおいて、あなたは行った。)

(53) ... virga *directionis* virga regni tui (PsGall 44:7)

(……あなたの王位の笏は廉直の笏。)

さらに(19)(38)の2箇所のεὐθύτηςを訳すのには、(54)(55)の *iustitia* (義) が用いられている。

(54) et ipse iudicabit orbem terrae in aequitate iudicabit populos in *iustitia* (PsGall 9:9)

(彼は公平をもって世界を裁き、義をもって諸国民を裁くであろう。)

(55) [...] cum accepero tempus ego *iustitias* iudicabo (PsGall 74:3)

([……] 機会を得れば、私は義を裁くであろう。)

注目すべきは、以上の PsGall の12箇所では *aequitas*, *directio* または *iustitia* が εὐθύτηςの「公正」の意味を表すのに用いられている一方で、問題の(2)に見られる *directum* は1度も用いられていないことである。

ちなみに以下の(56)(57)は、それぞれヨシュア記からの(24)と新約からの(17)のラテン語訳であるが、(56)では *sanctitas* (敬虔)、(57)では *aequitas* が、εὐθύτηςの「公正」の意味を反映させるのに用いられており、



やはり *directum* ではない。

- (56) *Et nunc timete Dominum et deseruite ei in sanctitate et iustitia, ...* (VET. LAT. Ios. 24, 14 (cod. 100))<sup>48)</sup>

(今あなたたちは主を恐れ、敬虔と義をもって彼に仕え、……)

- (57) *... et virga aequitatis virga regni tui* (Hbr 1:8)

(あなたの王位の笏は公平の笏。)

では *directum* はウルガータにおいて「公正」の意味をそもそも表さないのであろうか。

## IX

ウルガータにおいて *directum* は、問題の (2) の他に、以下の (58)~(63) の 6 箇所において現れる。<sup>49)</sup> この名詞はいずれも対格形で前置詞 (*in* または *per*) を伴い、ほぼ同一である (59) と (63) においては「真っ直ぐなものになる」(*esse in directum*) という表現で、その他においては、それぞれ *ire* (行く)、*levare* (上げる)、*sumere* (上げる)、*venire* (至る) を修飾して「真っ直ぐに」の意味で用いられている。

- (58) *ibant autem in directum vaccae per viam quae ducit Bethsames et itinere uno gradiebantur pergentes et mugientes et non declinabant neque ad dextram neque ad sinistram* (I Sm 6:12)

(雌牛はベテシメシに通じる道を真っ直ぐに行き、進み、鳴きながら一本の道を歩み、右にも左にも逸れていなかった。)

- (59) *omnis vallis exaltabitur et omnis mons et collis humiliabitur et erunt prava in directa et aspera in vias planas* (Is 40:4)

(あらゆる谷は高められ、あらゆる山と丘は低められ、曲がったものは真っ直ぐなものに、凹凸のあるものは平らな道に、なるであろう。)

- (60) *leva oculos tuos in directum et vide ubi non prostrata sis in viis sedebas expectans eos quasi latro in solitudine et polluisti terram in fornicationibus tuis et in malitiis tuis* (Ier 3:2)

(目を真っ直ぐに上げ、どこでお前が凌辱されなかったかを見よ。荒野の追い剥ぎのごとく、お前は彼らを待ち、道々に座していた。お前の淫行とお前の悪行によって、お前は地を汚した。)

- (61) *tonde capillum tuum et proice et sume in directum planctum quia proiecit*

Dominus et reliquit generationem furoris sui (Ier 7:29)<sup>50)</sup>

(頭髪を刈り、投げ捨て、哀歌を真っ直ぐに上げよ。主は彼を憤らせた世代を拒み、見捨てたからである。)

(62) et plaga maris mare magnum a confinio per directum donec venias Emath haec est plaga maris (Ez 47:20)

(海の側は、境界から真っ直ぐエマトに至るまでの大海であり、これが海の側である。)

(63) omnis vallis implebitur . . . et erunt prava in directa et aspera in vias planas (Lc 3:5)

(あらゆる谷は満たされ、……曲がったものは真っ直ぐなものに、凹凸のあるものは平らな道に、なるであらう。)

ここで重要なのは、これらの箇所における *directum* は、いずれも具体的な「真っ直ぐなこと(もの)」の意味で用いられており、抽象的な「公正」の意味で用いられているのではないことである。よって *directum* はウルガータにおいて後者の意味を表さないと考えられる。

従って(2)の *in directo* は「公正において(をもって)」ではなく、「真っ直ぐに」の意味で用いられていると言え、<sup>51)</sup> その原語である(14)の ἐν εὐθύτητι についても同じことが言える。<sup>52)</sup>

ここでIIにおいて示された、*in directo* が「真っ直ぐに」という意味の様態を表す副詞句としても、また「真っ直ぐな所で」という意味の場所を表す副詞句としても用いられるという事実を思い出そう。VIIで結論付けたごとく、(14)の ἐν εὐθύτητι は場所的な意味で用いられているのではないため、それを訳した(2)の *in directo* も場所的な意味で捉えられるべきではない。

結論として、PsGall 25:12の *in directo* は「真っ直ぐに」という意味で用いられているが故に、古英語の詩篇行間注解 G, I, J, K においてそれに対して与えられている「真っ直ぐな道に」という場所的な意味を表す注解は、原文のラテン語が表す様態的な意味を反映していないと言える。

## 注

- 1) R. Weber, *Le Psautier Romain et les autres anciens Psautiers latins*, *Collectanea Biblica Latina* 10 (Roma, 1953). 古英語のテキストの略記と引用の仕方は、原

- 則として、*DOE (The Dictionary of Old English: A-H on CD-ROM (Toronto, 2017))* に従い、ラテン語のテキストのそれは、原則として、同辞典または *TLL (Thesaurus Linguae Latinae (Leipzig, 1900-))* に従う。古英語およびラテン語の引用文中のイタリック体 (ただし聖書からの引用であることを示すものは除く)、ギリシャ語の引用文中の下線は、すべて筆者によるものである。なお、原文に付せられた注番号・注文字・注記号は省略した。
- 2) R. Weber et al., *Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem*, ed. quinta (Stuttgart, 2007).
- 3) それぞれのテキストは以下の通りである。A = The Vespasian Psalter, S. M. Kuhn (Ann Arbor, 1965); B = Der altenglische Junius-Psalter, E. Brenner, AF 23 (Heidelberg, 1908; Nachdr. Amsterdam, 1973); C = Der Cambridger Psalter, K. Wildhagen, Bib. ags. Prosa 7 (Hamburg, 1910; Nachdr. Darmstadt, 1964); D = Der altenglische Regius-Psalter, F. Roeder, Studien zur englischen Philologie 18 (Halle, 1904; Nachdr. Tübingen, 1973); E = Eadwine's Canterbury Psalter, F. Harsley, EETS 92 (London, 1889); F = The Stowe Psalter, A. C. Kimmens, (Toronto, 1979); G = The Vitellius Psalter, J. L. Rosier, (Ithaca, NY, 1962); H = The Tiberius Psalter, A. P. Campbell, Ottawa Mediaeval Texts and Studies 2 (Ottawa, 1974); I = Der Lambeth-Psalter, U. Lindelöf, Acta Societatis Scientiarum Fennicae 35, 1 (Helsingfors, 1909); J = Der altenglische Arundel-Psalter, G. Oess, AF 30 (Heidelberg, 1910; Nachdr. Amsterdam, 1968); K = The Salisbury Psalter, C. Sisam and K. Sisam, EETS 242 (London, 1959).
- 4) C. T. Lewis and C. Short, *A Latin Dictionary* (Oxford, 1879), s.v. *directum*.
- 5) *Seneca: Naturales Quaestiones, Books IV–VII*, with an English trans. by T. H. Corcoran, LCL (Loeb Classical Library) 457 (Cambridge, MA, 1972), p. 184. (9) は *OLD* (P. G. W. Glare, *Oxford Latin Dictionary*, 2nd ed., 2 vols. (Oxford, 2012)), s.v. *directus* 1c に「真っ直ぐに」(‘in a straight line, straight forward’) の意味の *in directum, per directum* の例として挙げられている。
- 6) *Varro: On the Latin Language, Books V–VII*, with an English trans. by R. G. Kent, rev., LCL 333 (Cambridge, MA, 1951), p. 282.
- 7) F. Krohn, ‘M. Ceti Faventini Liber Artis Architectonicae’, *Vitruvii De Architectura Libri Decem* (Lipsiae, 1912), pp. 274–75.
- 8) E. Oder, *Claudii Hermeri Mulomedicina Chironis* (Lipsiae, 1901), p. 33.
- 9) B. Paulus, *Pascasii Radberti Expositio in Lamentationes Hieremiae Libri Quinque*, CCCM 85 (Turnholti, 1988), pp. 155–56.
- 10) (10) は *OLD*, s.v. *directus* 1c において「(道の) 真っ直ぐに伸びた所で」(‘on a straight stretch (of road)’) の意味の *in directo* の例として挙げられている。(10) ~ (12) は *TLL*, s.v. *de(di)-rectum* 1 の「本来的に」(‘proprie’) の a において、

- 各種前置詞と共に用いられたもののうち、 $\alpha$  の in directo の形の例として、この順番で区別なく挙げられている (vol. 5, pt. 1, p. 1254, 79–84)。
- 11) 本稿における生没年は R. Gryson, *Répertoire Général des Auteurs Ecclésiastiques Latins de l'Antiquité et du Haut Moyen Âge*, 2 vol. (Freiburg im Breisgau, 2007), A. Blaise, *Dictionnaire Latin-Français des Auteurs du Moyen-Âge* (Turnholti, 1975) または T. Wittstruck, *The Book of Psalms: An Annotated Bibliography*, vol. 1 (New York, 1994) による。
  - 12) M. Adriaen, *Magni Aurelii Cassiodori Expositio Psalmorum I–LXX*, CCSL 97 (Turnholti, 1958), pp. 233–34.
  - 13) L. de Coninck, *Theodori Mopsuesteni Expositionis in Psalmos Iuliano Aeculanensi Interprete in Latinum Versae Quae Supersunt*, CCSL 88A (Turnholti, 1977), p. 124.
  - 14) J.-P. Migne, 'Explanatio in omnes psalmos', *Haymonis Halberstatensis Episcopi Opera Omnia*, PL 116 (Turnholti), col. 279D.
  - 15) J. Leclercq, H. Rochais, *Sermones 2*, Sancti Bernardi Opera 5 (Romae, 1968), pp. 302–03.
  - 16) A. Bardani, *Psalterium Davidicum Syntactica Paraphrasi . . . ed. altera* (Romae, 1830), p. 74.
  - 17) J. Niglutsch, *Brevis Explicatio Psalmorum*, ed. quinta (Bauzani, 1923), p. 80.
  - 18) J. Knabenbauer, *Commentarius in Psalmos*, ed. secunda (Parisiis, 1930), p. 111.
  - 19) M. Mičoch (*Psalmi Latinae Vulgatae* (Regensburg, 1900), p. 60) は (2) を「我が足は真っ直ぐな道に立つ。……」(‘Pes meus stat in via recta, . . .’) と言い換える。
  - 20) (2) の前半は J. Ecker, *Porta Sion: Lexikon zum lateinischen Psalter* (Trier, 1903), s.v. *directus* において「我が足は平らな(真っ直ぐな)道に立つ」(‘es steht mein Fuß auf ebenem (rechtem) Wege’) と訳されている。
  - 21) G. Hoberg (*Die Psalmen der Vulgata*, 2. Aufl. (Freiburg im Breisgau, 1906), S. 82) は、(2) を「私は真っ直ぐな道の上を行く。……」(‘Ich gehe auf dem rechten Wege; . . .’) と訳し、ここの *directum* を εὐθύτης と מישור に関連付けて「正しいこと、義(例えば44:7の *virga directionis* (廉直の笏); 我が足は正義に立つ=私は真っ直ぐな道の上を歩む」(‘Recht, Gerechtigkeit (z. B. 44, 7: *virga directionis*, gerechtes Zepter); mein Fuß steht auf dem Recht = ich wandle auf dem rechten Wege’) と述べる (S. 83)。
  - 22) A. Schulte (*Die Psalmen des Breviers*, 2. Aufl. (Paderborn, 1917), S. 91) は (2) を「我が足は真っ直ぐな道の上に立つ。……」(‘Mein Fuß steht auf dem rechten Weg, . . .’) と訳して、in *directo* が ἐν εὐθύτητι に対応することを示し、「義において」(‘in Redlichkeit’) という意味を記す。
  - 23) V. Thalhofer (*Erklärung der Psalmen*, 9. Aufl. hrsg. von F. Wutz (Regensburg,

- 1923), S. 178) は (2) を「我が足は真っ直ぐな小道の上に立つ。……」(‘Auf rechtem Pfade steht mein Fuß; . . .’) と訳す。
- 24) (2) は A. Sleumer, *Kirchenlateinisches Wörterbuch* (Limburg a. d. Lahn, 1926), s.v. *directum* 1 の「真っ直ぐな、平らな道」(‘der gerade, ebene Weg’) に挙げられている。
- 25) (2) の in directo は、A. Blaise, *Dictionnaire Latin-Français des Auteurs Chrétiens*, rev. par H. Chirat (Turnhout, 1954), s.v. *directus* 4 の「真っ直ぐな、正しい」(‘droit, juste’) において、「真っ直ぐな道に」(‘dans la voie droite’) と訳されている。
- 26) A. Rahlfs, *Septuaginta*, ed. altera (Stuttgart, 2006). ギリシャ語のテキストの略記と引用の仕方は、原則として、LSJ (H. G. Liddell and R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, rev. by H. S. Jones, with a revised supplement (Oxford, 1996)) または G. W. H. Lampe, *A Patristic Greek Lexicon* (Oxford, 1961) による。
- 27) *Aristotle: The Categories*, . . . with an English trans. by H. P. Cooke, LCL 325 (Cambridge, MA, 1938), p. 70. (15) は、LSJ, s.v. εὐθύτης の「真っ直ぐなこと、καμπυλότης (曲がっていること) の反対」(‘straightness, opp. καμπυλότης’) の語義の下に引用されている。
- 28) (16) の εἰς εὐθύτητα は以下のラテン語訳 (D. De Bruyne, ‘Les anciennes versions latines du Cantique des Cantiques’, *Revue Bénédictine* 38 (1926): 103) では (9) に見られた in directum (真っ直ぐに) へと訳されている—— Et fauces tuae tamquam uinum optimum. <Ecclesia de christo dicit>. Ambulans cum fratre meo in directum sufficiens labiis meis et dentibus (あなたの喉は最良の葡萄酒のよう。(教会がキリストについて言っている。) 我が兄弟と共に真っ直ぐに歩み、我が唇と歯に十分である)。
- 29) Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, 28. revidierte Aufl. (Stuttgart, 2015). (17) は、W. Bauer, *Griechisch-deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur*, 6. Aufl. hrsg. v. K. Aland u. B. Aland (Berlin, 1988), s.v. εὐθύτης において、「我々の文献では比喩的にのみ」(‘in uns. Lit. nur übertr.’) と記され、「義、公正」(‘d. Gerechtigkeit, d. Rechtschaffenheit’) の語義が示されたあと、「公正な笏」(‘d. gerechte Szepter’) という訳と共に挙げられている。
- 30) M. Whittaker, *Die apostolischen Väter 1: Der Hirt des Hermas*, 2. Aufl. (Berlin, 1967), S. 12.
- 31) (18) は、Bauer, s.v. εὐθύτης において、ここに見られる πορεύεσθαι ἐν τῇ εὐ. τοῦ κυρίου という表現への「主の公正において歩む」(‘in der Rechtschaffenheit des Herrn wandeln’) という意味と共に挙げられ、また Lampe, s.v. εὐθύτης 3 の「義」(‘righteousness’) においても、「神の」(‘of God’) 義についての例として

- 挙げられている。
- 32) F. Brown, S. R. Driver, and C. A. Briggs, *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament* (Oxford), s.v. מְיוֹר 2.
- 33) F. Zorell, *Lexicon Hebraicum Veteris Testamenti* (Roma, 1989), s.v. מְיוֹר 1.
- 34) C. G. Bretschneider, *Lexicon Manuale Graeco-Latinum in Libros Novi Testamenti*, ed. tertia (Lipsiae, 1840), s.v. εὐθύτης.
- 35) LXX と新約聖書ギリシヤ語原典の語句の検索には、それぞれ E. Hatch and H. A. Redpath, *A Concordance to the Septuagint*, 2nd ed. (Grand Rapids, 1998) と *Concordance to the Novum Testamentum Graece of Nestle-Aland, 26th Edition*, . . . ed. by Institute for New Testament Textual Research . . . 3rd ed. (Berlin, 1987) を使用した。ちなみに ἐν εὐθύτητι は新約には見られない。
- 36) (19)(20) は T. Muraoka, *A Greek-English Lexicon of the Septuagint* (Louvain, 2009), s.v. εὐθύτης 2 の「(道徳的) 完全さ」(‘moral integrity’) に挙げられている例である。
- 37) (24) は LSJ, s.v. εὐθύτης II の「義」(‘righteousness’) に、(25) は Muraoka, s.v. εὐθύτης 2 に挙げられている例である。
- 38) (29) は Muraoka, s.v. εὐθύτης 2 に挙げられている例である。
- 39) P. Sabatier, *Bibliorum Sacrorum Latinae Versiones Antiquae*, 3 tom. (Remis, 1743; repr. Turnhout, 1976), tom. 2, p. 434.
- 40) (30) の σκάνδαλον (罣) は Muraoka, s.v. σκάνδαλον 2 の「それにより自分の名声や公的な印象が傷つくかもしれないもの」(‘that over which one’s reputation or public image might suffer’) の例として、ここの θήσεις σ. ἐν εὐθύτητί σου への「お前の完全さを損うかもしれない」(‘you would mar your integrity’) という解釈と共に挙げられている。すなわち Muraoka は (30) の εὐθύτης を、(19)(20)(25)(29) のそれと同じく、「(道徳的) 完全さ」(‘moral integrity’) の意味で捉えている。
- 41) (31) は Muraoka, s.v. εὐθύτης 1 の「曲がらない真っ直ぐな足取り」(‘straight gait without curves’) において、ここに見られる ἐπιβαίνω ἐν ~ητι という表現への「真っ直ぐに歩く」(‘to walk straight’) という意味と共に挙げられている。なお同じ Muraoka, s.v. εὐθύτης 1 にはもう 1 例「同じ意味で」(‘in same sense’) として (16) が挙げられている。
- 42) (39) は Muraoka, s.v. εὐθύτης 2 において「(複数) 高潔な行い」(‘pl., deeds of integrity’) の例として挙げられている。
- 43) J.-P. Migne, ‘Interpretatio in Psalmo’, *Theodoretii, Cyrensis Episcopi, Opera Omnia*, ed. J. L. Schulze, PG (Patrologia Graeca) 80 (Paris, 1860; repr. Turnhout, 1977), col. 1048B-C.
- 44) J.-P. Migne, ‘Euthymii Commentarius in Psalmos Davidis’, *Euthymii Zigabeni*

- Opera Quae Reperiri Potuerunt Omnia*, t. primus, PG 128 (Parisii, 1864), col. 317D–319A.
- 45) LSJ, s.v. ὀρθότης.
- 46) Muraoka, s.v. εὐθύτης 2.
- 47) A. Pietersma, *A New English Translation of the Septuagint and the Other Greek Translations Traditionally Included under That Title: The Psalms* (Oxford, 2000), p. 22.
- 48) U. Robert, *Heptateuchi Partis Posterioris Versio Latina Antiquissima e Codice Lugdunensi* (Lyon, 1900), p. 103.
- 49) ウルガータの語句の検索には *Novae Concordantiae Bibliorum Sacrorum iuxta Vulgatam Versionem Critice Editam, quas digessit B. Fischer*, 5 tom. (Stuttgart-Bad Cannstatt, 1977) を使用した。
- 50) (61) の *et sume in directum planctum* (哀歌を真っ直ぐに挙げよ) はヘブライ語原典の קִיָּאֵי עַל-פְּנֵיִם (哀歌を高地で上げよ) に対応しており、(61) については *TLL*, s.v. *de(di)rectum* 1a β において「ヘブライ語原典の誤訳から」(‘ex falsa interpr. textus hebr.’) と記されている (p. 1255, 11)。
- 51) (2) は *TLL*, s.v. *de(di)-rectum* 1a α において、(10)～(12) に続けて——「比喩的に」(‘metaphorice’) と付記されてではあるが——挙げられている (p. 1254, 84–85)。すなわち (2) の *in directo* は (10)～(12) のそれと同じく「本来的に」(‘proprie’) 用いられている——前者は譬えの(非実用的)文脈において、後者は現実的・実用的文脈において使われているという違いはあるにせよ——と *TLL* は見なししているわけである。本稿も結論としてそうである。だがその一方で、本稿が扱った、(2) ならびに (10)～(12) の *in directo* が様態的な意味(「真っ直ぐに」)と場所的な意味(「真っ直ぐな所で(に)」)のどちらかで用いられているのかという問題については、*TLL* は言及していない。
- 52) ちなみに (14) の ἐν εὐθύτητι は、以下の Augustinus (430 没) の引用に見られるように、*in rectitudine* に訳されることもある。この *in rectitudine* という表現自体は、Lewis and Short が *rectitudo* に「真っ直ぐであること」(‘*Straightness, directness*’) と「(比喩的に) 公正」(‘*Trop., uprightness, rectitude*’) の両方の語義を与えていることから、「真っ直ぐに」と「公正において(をもって)」のいずれも意味し得ると考えられるが、ここでは *in rectitudine* は以上の議論から前者の意味で捉えられるべきである——「『……我が足は真っ直ぐに立った。』実際私は至る所で、人間的な軽率さにより裁きを非難する者たちの、畏や誘惑により動揺させられた。しかし『我が足は真っ直ぐに立った』。ところでなぜ『真っ直ぐに』なのか。先に『主に希望を掛け、私は揺らがないであろう』 [25:1] と述べたからである」(‘... *pes meus stetit in rectitudine. Concussus sum quidem undique scandalis et tentationibus reprehendentium iudicium*

humana temeritate; sed *pes meus stetit in rectitudine*. Quare autem *in rectitudine*? Quia superius dixerat: *Et in Domino sperans non mouebo*r' (E. Dekkers et I. Fraipont, *Sancti Aurelii Augustini Enarrationes in Psalmos I-L*, CCSL 38 (Turnholti, 1956), pp. 150-51)). 今義博他訳『詩編注解 (1)』アウグスティヌス著作集 18/I (教文館、1997)においても、この *in rectitudine* は「真直ぐに」と訳されている (258頁)。



## On the Old English Equivalent of *in directo* in Ps 25:12

Satoru ISHIHARA

The *in directo* ‘straight’ in *pes meus stetit in directo* (PsGall 25:12) ‘my foot stood straight’ is glossed in the sense ‘on the/a straight way’ in four psalters with interlinear Old English glosses, e.g. *for min stod on þam rihtan wege* (PsGIG 25.12).

Latin *in directo* means not only ‘straight’ as an adverbial phrase of manner, e.g. *et primum in directo iactatis axibus, sequentibus in transverso stratis*, . . . (CET. FAV. 19) ‘and if the planks are laid straight first, the next ones strewn crosswise, . . .’ but also ‘at a straight place’ as an adverbial phrase of place, e.g. *iubent in directo pedum VIII esse uiam, in anfracto XVI, id est in flexu* (VARRO ling. 7, 15) ‘[the laws] order a road to be eight feet [wide] on a straight stretch, sixteen at an anfractum, that is, at a curve’. It is to be said, therefore, that the *in directo* in PsGall 25:12 is understood in the local sense when it is rendered as ‘on the/a straight way’, or interpreted with reference to a way, as is done e.g. by Iulianus Aeclanensis commenting on PsGall 25:12: . . . *quemadmodum a recti tramite numquam in praua detorserim* ‘. . . how I have never strayed from the footpath of the straight into the crooked’.

The *in directo* derives from the ἐν εὐθύτητι ‘straight’ in ὁ γὰρ ποὺς μου ἔστη ἐν εὐθύτητι (Lxx Ps.25(26).12) ‘for my foot stood straight’. Greek εὐθύτης ‘straightness, uprightness, righteousness’ found elsewhere in the LXX does not occur in the sense ‘a straight place’. And ἐν εὐθύτητι can be used in the sense ‘straight’ as in ἐπέβη ὁ ποὺς μου ἐν εὐθύτητι (Lxx Si.51.15) ‘my foot went straight’. Moreover, εὐθύτης found elsewhere in the LXX Psalms is rendered by *aequitas*, *directio* or *justitia*, all reflecting the sense ‘uprightness, righteousness’ of εὐθύτης, and never by *directum*. Finally, *directum* found elsewhere in the Vulgate does not occur in the sense ‘uprightness, righteousness’. These facts enable us to say that the ἐν εὐθύτητι in Lxx Ps.25(26).12 is used in the sense ‘straight’.

Thus we can conclude that the *in directo* in PsGall 25:12 means ‘straight’, and accordingly that its sense of manner is not reflected in the Old English glosses in the local sense of ‘on the/a straight way’.